



ふるさと歴史館第7回企画展

常陸国府

と

瓦塚窯跡

瓦塚窯跡は石岡市部原に存在する奈良・平安時代の生産遺跡です。主として瓦を焼いており、石岡市教育委員会では平成19年度から継続的に調査してきました。その結果、古墳時代の須恵器窯1基、奈良・平安時代の瓦窯34基、製鉄炉1基を検出するなど大きな成果を上げることができました。

今回、その成果を紹介するとともに、それらの瓦がどこに供給され、石岡地区に置かれた常陸国府ではその時何が起きていたのかを考えてみたいと思います。

場 所:ふるさと歴史館(石岡市総社1-2-10 石岡小学校敷地内)

開催期間:平成28年3月4日(金)~平成28年5月29日(日)

開館時間:10:00~16:30

休館日:毎週月曜(ただし、月曜が祝祭日のときはその翌日)

瓦塚窯跡と国府のかかわり

年 代	瓦塚窯跡の出来事	国府の出来事
8世紀前葉	瓦の生産開始。規模小さい。	国庁・茨城廃寺の建設
8世紀中葉	かすみがうら市松山瓦窯が大規模に操業し、瓦塚窯跡はその補佐役になる。平城京系の瓦の登場。	国分寺・国分尼寺が建設される。鹿の子C遺跡も大規模化。国庁も瓦葺きになる。
8世紀後葉	再び国分寺の瓦の範が瓦塚に戻り、瓦生産の中心になる。	このころ国分寺が完成か。鹿の子C遺跡全盛。武器の生産を中心に行う。
9世紀	窯4基が1セットになって操業が安定化する。修復用の瓦が焼かれる。	地震で国分寺倒壊するなど国分寺の維持管理が行われる。鹿の子C遺跡農具の生産が増える。国庁が荘厳化。
10世紀	北側の一帯が操業され、その後瓦の生産が終了する。	個人による仏教の信仰が進む。国分寺は維持管理されなくなる。

※前葉・中葉・後葉とは100年間を3等分した年代を指します。8世紀前葉なら西暦700～733年頃ということになります。

※鹿の子C遺跡は石岡市鹿の子で確認された鍛冶工房。連坊式堅穴と呼ばれる巨大な遺構が出土し、大規模に操業されたことが分かっています。近年の研究では8世紀中葉から後葉にかけては小札（こざね）という鎧を作るための部品が大量に出土することから対蝦夷との戦争の武器を作成していたものとされ、9世紀以降は鎌などの農具が多いことから、常陸国内の鉄製品を生産していたものと考えられています。

※国庁は現在の県庁の庁舎のこと。8世紀前葉は50m四方と規模が小さく、その後100m四方と規模が大きくなり、8世紀中葉にはついに瓦葺きになります（石岡小学校敷地内）。

上の表を見ると国分寺が建設される頃に常陸国府で大きな画期があることがわかります。8世紀中葉は国分寺以外にもこれまで小規模であった国庁が瓦葺きになります。これに伴い、瓦の工房が大規模になりますが、鹿の子C遺跡も一番古い連坊式堅穴が出土することから、もしかすると対蝦夷以外にも国分寺建設など国府向けに釘などの鉄製品を供給していたのかもしれませんが。

その後、9世紀になると瓦塚窯跡は前葉・中葉・後葉と4基が1セットになって安定的に操業されます。国分寺や国分尼寺の修復を定期的に行っていたのでしょう。この時期、国庁は西側に曹司（ぞうし）と呼ばれる何かしらの役所の機能を持った掘立柱建物が出現します。この建物まで含めると国庁はもっとも大規模になります。国府の円熟期といえるでしょう。

10世紀になると国庁はわずかに正殿と前殿を残し衰退していきます。これは地元根付いた国司が自らの館で直接政務をとるようになるためと思われる。また、これまで国の安寧を願うためのものであった仏教も都の貴族が個人的に信仰するようになると国分寺も衰退してきます。この時期にあわせるかのように瓦塚窯跡も操業を終了するのです。

以上みてきたように、瓦塚窯跡の窯の変遷は国府の動向とよく一致しています。つまり、国分寺の創建や維持管理などの国の政策が反映されていると言えるでしょう。このことから、国司が主体となって瓦が焼かれていたということが分かるのです。